

《講演記録》

『山海経』における神鳥鳳凰

——異鳥なれど異鳥にあらず——

朽尾 武

一、鳳凰という鳥はどのような鳥か

(巻末資料①・②—1参照)

鳳凰という鳥が一体何者だという事は、中々わからないんです。ただ、孔雀の仲間、あるいはセイランではないかと言われています。皆さんよく御存じだと思いますけど、セイランは多摩動物園とか、ズーラシアにいます。いるけれども、狭い所にいれられているものですから、生態がはっきり分からない。本当は孔雀のように羽を広げまして、恋人にプロポーズする有り様が中々、良いものらしいですよ。だけど、私は見たことありません。一方、孔雀は非常にサービス精神旺

盛で、私が、野毛動物園に居ますと、近寄ってきて羽を広げてくるくる回ってくれて、中々サービス精神旺盛だと思うわけです。意外なことに、恐らく、古代中国には、孔雀もセイランもいかなかったんじゃないかと思えます。孔雀もセイランも、南の方の鳥なんです。陽の鳥、陰陽五行で云えば、火の鳥であり、陽の鳥であり、フェニックスなどと同じような仲間と考えられるわけです。

中国の都というのは大体北の方にありますから、孔雀もセイランもいるはずですね。近くの国からシルクロードを通って、献上したらしいのですよ。それが宮廷で飼われたり、逃げ出したりして中国の北の地域で見られるようになった可能性があります。

二、「百年歌」について

今年、私は八十歳になりました。昔、「百年歌の研究」というのを『成城文藝』に書いた事があります。創立八十周年記念特集、それに書いたんですけれども、この「百年歌」というものは非常に面白いもので、葬式の時に歌ったものだった。今歌うかどうかは知りませんが、それを歌う非常に声の美しい青年が葬儀屋さんに雇われたんですね。「百年歌」には色々あって、例えば十歳くらいのものから、百歳くらいのものであるし、四十歳くらいからのものもある。

人間というものは、百歳までは努力すれば生きられる。けれどもそれ以上は仙人にならなければいけない。仙人というものは、皆さん霞食って生きてると思うでしょう。それは、修行の時だけなんです。本当の仙人になって上仙になれば、美女と一緒に酒を呑んでご馳走を食べる。これが、本当の仙人の生活なんです。それを、我々は霞を食って暮らしていると思っておりますが、ちよつと違うんですね。

私がこの学校に勤めたのは、四十代ですけれどもね、この「百歳歌」によると、四十代というのは、

四十時 四十歳の時

體力克壯志方剛 體力いや盛ん志まさに壯ん

跨州越郡還帝鄉 州郡を巡り功成り都に還る

出入承明擁大璫 承明廬に出入し玉冠をまとう

清酒漿炙奈樂何 清酒焼肉の樂しみも（これに比べり

や）何ほどもなし

清酒漿炙奈樂何 清酒焼肉の樂しみも（これに比べり

や）何ほどもなし

（注）○承明（廬）―石渠閣（図書館）外にありて侍従の宿直所。

こういうふう唱歌うんですね。当人が死んでから、こう歌われるんです。それで、八十歳はどうかというと、

八十時 八十歳の時

明已損目聰去耳 視力すでに失い目してしまった

前言往行不復紀 昔言ったことをもしたこともとんと憶

えず

辭官致祿歸桑梓 職を辭し俸祿を返上し故郷へ歸る

安居駟馬入舊里 ゆったり身を休め四頭立て馬車でお國

入り

樂事告終憂事始 事を樂しみ人生の終りを告げ死の憂い

が始まる

こんなふうです。

三、鳳凰を研究する意義

なぜ、鳳凰とか、そういうものを研究するかというと、私は、文学作品を読むといつも、出てくる鳥や獣や植物に、非常に興味を持つわけです。大概の人は、気にも留めずすつと通るものでしょう。でも私は、もうちょっと知りたい、という気がするわけです。

鳳凰は鳥の王であり、神の鳥だと言われている。中国では、おそらくセイランという鳥ではないかと言われています。孔雀という説もあり、私は孔雀の説の方が良いんじゃないかと思うんです。セイランはあまり派手な色をしていないんですよ。ところが、鳳凰は五色だというんですね。

私、いろんな鳥に色づけしてみたんですよ。こういう色ではないかと、書いてある通りに色をつけてみたんですよ。三十枚か四十枚色づけしたんですけれども、今日は、全部はお見せできませんね。異鳥類だけで相当あるわけです。

四、鳳凰と梧桐と竹の実（巻末資料②参照）

これ（巻末資料②—1参照）は、『古今圖書集成』の鳳凰に色を付けたものです。この中に木がありますでしょう。青い木が、これが梧桐、つまり青桐です。

鳳凰は、梧桐に住むという。そして、竹の実を食べるといいますよ。皆さん竹の実を食べた事ありますか。私は食べた事があります。美味しくはないですけどもね。皆さん今度、ご自分の家の近くに笹が生えていたら、注意して見てください。花が咲いて、実をつけている場合があります。それを食べるわけです。

鳳凰が住むという梧桐は、普通の白桐とはちよつと種類が違うんですよ。成城の街でも、何軒かの家の庭に植えてあります。青い幹を鑑賞する植物なんです。本来は大木なんです。だけど、日本の街路樹やら、庭に植えてあるものは、意外に小さいものです。

実がついて、桐の中で唯一食べられるのが梧桐だと『本草綱目』などに書いてあります。六月に花が咲きますからね。

梧桐と鳳凰という組み合わせは、有名なんです。『詩経』

の中に出てくるんです。けれども絵になったのは極めて新しいんです。明の時代です。私の狭い物の見方からすれば、明の時代にならないと出てきません。仇英とか沈南蘋、こういう人が描いています。この頃まで、これだけ有名な鳳凰が絵に描かれてないというのは不思議なんですけれども、おそらく、絵描きさんの感性からすると、見た事ないものを絵に出来ないというのがあったかもしれません。

それからもう一つ、沈南蘋が青桐にイカルを描いている（巻末資料②-2）。ですから、鳳凰だけが食べるわけじゃないんですよ。この実はね。

五、鳳凰と烏鳳（巻末資料②-2・③参照）

ただ、考古学的に、金石文、石や金属などに記された鳳凰はあるんです。古くから。ですから、鳳凰は彼らの認識からすれば、いたであろうという事は言えるんですね。

鳳凰の仲間というのがいくつかあります。鸞鳥、セイラン。それから、烏鳳、鸚鵡です。なぜかというところ、鸚鵡は群れをなして飛ぶでしょう。『山海経』などに、出てくるんですね。あるいは古い文献に、鳳凰が群れをなして飛んできた

いうふうに出てくる。三百とか数が多い。けれども、鳳凰がこんなにとくさんいて、飛んだかどうかちょっと疑問ですよ。鸚鵡なら分かりますよね、五色の綺麗な鸚鵡、いますから。だから烏鳳というのが鸚鵡の一種と『本草綱目』の中に書いてあるという事から考えれば、納得いくわけです。

六、「禹貢」について（巻末資料④参照）

資料（巻末資料④）を見て下さい。これは「禹貢」といって、堯、舜、禹という神話上の皇帝がいますよね、この禹が作らせたという地図ですけれども、伝説上の話ですから、実際には殷か周あたりに作られたものではないかと思えます。国の大きさは、秦の始皇帝が天下統一するまであんまり変わらないんですよ、黒く枠が書いてあるでしょう、これが「禹貢」の地図です。

九州の南の方は、中国の領地じゃなかったんですね。それから、雲南省もそうです。それから青海省もそう。新疆省も中国の領地ではなかった。という事を知って、『山海経』が書かれるようになった時代は、この「禹貢」の時代であると、私は考えているわけですね。

七、『山海経』について（卷末資料⑤参照）

鳳凰の記述が見られる『山海経』の本文の釈文（卷末資料⑤①②）を見て下さい。『山海経』というのはね、地理書であり、文化地理の書物ですね。ですから、さまざまな人によって手を加えられるわけです。経書は、『論語』とか、ああいうものは、本文があまり変わっていきませんね。けれども『山海経』の場合には削られたり、加えられたりして、それで大体、『三国志』の三国の終わった後の晋の頃に郭璞（AD²⁷⁶—324）という人が注をつけた。それが、我々が今見る本文なんです。隷書で書いてあるのがありますね。これが郭璞の注です。私はこういうもの（卷末資料⑤①②）を百枚くらい作りました。今日のこの資料は最初の二枚分くらいです。この枠の中に、甲とか金とか篆とかいうのが書いてありますね。この順番に、一応、字体を変えてみた。

また、この資料には五体、甲骨文字、金文、篆書、隷書、楷書と、五つの字体で『山海経』の本文を書いてあります。なぜこんな事をしたかといいますと、『山海経』が書かれたのがいつであったのか、ある程度見当つける意味があったたわ

けです。

これ、私が書いたのですけれども、典拠はちゃんとあります。ただ、甲骨にないから、甲骨以外の時代で書かれたかというところ、そうじゃないです。つまり、甲骨文字も金文も、まだ研究が完結してないわけじゃない。ですから、無い場合もある。その字がまだ発見されていないものもある。

八、風という字と鳳凰の関係

（卷末資料⑤①②参照）

それから、鳳凰の「鳳」の字は、「風」という字の親戚なんです。「鳳」の方が先で、「風」は後から生まれた字です。極楽鳥を今は風鳥と言いますね。極楽鳥が中国にもたらされた頃、おそらく、甲骨時代でしょうね。その頃に生まれた字だと思ふ。極楽鳥というのは、ニューギニアとか、南の方に居る鳥で、西洋や中国に輸出されてるんですね。そのとき、どうも脚を切って輸出していたらしいんですよ。脚が無いでしょ、だから、一生、空を飛んでる鳥だというわけです。そこから「風」という字が生まれたんじゃないかと思ひます。

九、博物学について（巻末資料⑥参照）

私は、子供の頃から博物学に物凄く興味があったんですね。というのは、親がいつも博物館とかそういう所に連れてってくれたものだから、そういうのを見ていたわけです。ところで、極楽鳥の標本、剥製、皆さんのお家にありますか。いや、意外にあるんですよ。子供の頃の私の家にも、玄関に飾ってありました。かつては、東京に来てからの私の部屋にもオオフウチョウの立派なのが飾ってあったんです。

皆さんのお家にも、場合によってはあると思いますね。博物館に行けばもちろんあります。風鳥っていうのは種類が多くて、プロポーズする時に、踊ったり、跳ねたり、色々するわけです。

十、鳳凰と中国との関係

鳳凰は、最初は、シルクロードを通って入ってきた、極楽鳥だったと思います。けれども、やがてはそういうものが忘れ去られてしまった。東南アジアなどにいる、カムリセイ

ランとセイランと二種類いるんですけど、そういうものやら、それから孔雀やらが、いずれも何度か近隣の国から献上されて入ってきた。それを、上林苑などの天子の庭園に放してたんじゃないかと思うんです。孔雀やセイランっていうのは我々でも、簡単に飼えるんですよ。鶏の餌があれば、飼えるわけです。私の少年時代、戦争中ですが、孔雀を飼ってる人がいました。羽をとって、売るんです。意外にも、飼う気があれば、孔雀というのは飼えるんですね。北方でもわりに平気です。ですから、中国では、逃げ出して野生化してるのもいる。

それから、迷鳥、東南アジアの方から飛んで来る。そういうのがあちこちに来たんだろうと。

しかし、あくまで南の鳥ですから、北の方には本来生息していません。けれども、中国であちこちにいることになっているんですよ。一部は、政治的に困難な時代や、めでたいうちに、鳳凰が現れたと、いうことになって、めでたしめでたしと。それで年号にも「鳳」の字がつけられた時代がありますね（前漢・元鳳（BC 57～54）。新・天鳳（AD 14～19）等）。

十一、『本草綱目』について

(巻末資料⑦参照)

資料(巻末資料⑦)に、『本草綱目』というのがあります。『本草綱目』の原本は、色々あります。それから、江戸時代に出たものともあります。『本草綱目』というのは、漢方を扱う人は使うと思いますが、今の漢方の人はあんまり使わないでしょうね、博物学の書物ですよ。

『本草綱目』の話ですが、例えば最初の「釈名」のところ、
 「羽蟲三百六十の中で鳳がその長である」と書いてあるんですけど、三百六十どころじゃないですね本当は。中国の鳥は大体千六百くらいいるだろうと思います。迷鳥も入れましてね。皆さん不思議に思うかもしれないけれど、青海湖にフラミンゴがいるんですよ。ああゆうのが飛んでくるわけですよ。いろんな珍しい鳥が中国には飛んできて、それで、千六百はちょっと多めにみますけど、千三百ぐらいが、在来の鳥だと思われまます。表現が段々と儒教的になってくるんです。「集解」のところにも書いてあるでしょう。「時珍曰く、鳳は南方の朱鳥である」と。朱は、五行の色ですね。「朱い鳥」

だと云ってるんですけど、実はね、五種類くらいの色があると言われています。さらに「前は鴻に、後は麟に、額は燕に、喙は雞に、頸は蛇に、尾は魚に、類は鶴に、頸は鶩に、文は龍に」とあります。儒教の神だから、そういうふうの色々書くんですね。それで、「天下に道あればあらはれる」と言ってるでしょう。つまり、良い政治をすれば鳳凰が現れると。私ね、宮中が相当、操作してると思うんですよ。自分のところで飼ってるのを放したり色々して、人民を操縦してる。そういうふうに見えるわけです。

それで、資料(巻末資料⑦)の上にも書いてありますけど、「集成」の六十三つて所に、鳳凰の事が書いてある。色んな名前があるわけですね。瑞鷗、鸞鷲、鸕、鷓鴣、朱鳥など、色んな鳳凰の仲間があると。さっき言いました鸚鵡も、おそらく鳳凰の一つだろうと思います。

つまり、人民がね、見つけましたって言えば褒美貰えるわけでしょう。だから色んな事いうわけです。けれども、ただ言えることは、大体、孔雀形のものが、鳳凰ですね。立派な脚をしています。

十二、狩野探幽の絵（巻末資料⑧参照）

それから、鳳凰と孔雀との違いは判りますか。鳳凰の絵も孔雀の絵も今あるんですが、孔雀の絵を見ると、目玉が羽に入ってるんですよ。ところが、鳳凰は入ってない。そういう違いがありますね。

江戸時代の絵描きも、色々な鳳凰を描いています。江戸時代というのは、大名が博物学を非常に好んで、博物学的な絵を収集するんです。

こういうような絵（巻末資料⑧-1）を多く描いてるんですよ。見たような事を描いてる。実際見たことないんですけどね。

狩野探幽っていう人いますね、江戸初期の幕府の御用絵師です。この人の描いた絵がかなり強く影響を与えています。

狩野探幽の絵を一番見やすいのは、日光の東照宮です。たくさんあります。この絵は、色を付けたんですけど、これは、明の沈南蘋、仇英などの絵に描いたものをもとに、色付けしてるんですよ。

例えば現代の画家、明治大正の画家ですけれども、やっぱり

り梧桐、青桐と鳳凰を描いていますね。ただし、古い絵には、青桐と鳳凰を組み合わせたものって、本当に無いんですよ。例えば、故宮博物院とかね、そういう所のものを見て、全然出てきません。画集を見ましてもね。ですから、青桐と鳳凰とを組み合わせた絵は、案外新しいということが言えますね。

これは、官女を描いたもの（巻末資料⑧-3）です。青桐があるでしょう。これは清朝の頃の絵なんですけどね。仕女、女官のことを仕える女というんですけど、仕女の絵に出たりしています。もう一つ仇英の絵（巻末資料⑧-3）、これ青い鳳凰です。またこれは、日光東照宮のもの（巻末資料⑧-1）です。狩野探幽と関りがあります。

また、狩野探幽のもの（巻末資料⑧-1）なんですけどね、これは明らかに、沈南蘋の影響を受けています。做ってるんですよ。大体これが日本人の鳳凰の絵の典型です。それで、皆さんが鳳凰というのが、一番頭にあるのは、宇治の平等院のあの鳳凰（巻末資料⑧-2）ですよ。これは孔雀でしような、まるで。けれども、孔雀と違うのは、目玉がないという事です。

(注) 後世の絵には孔雀の影響もあり、羽の先端に目の入った鳳凰もある。

十三、鳳凰を意匠としたもの (巻末資料⑨参照)

鳳凰の意匠を、製品化したものについていうと、硯、墨、鏡、鏡は有名ですね。

「龍鳳凰」つていう形と、鳳凰だけのものがあつて、虎と鳳凰の組み合わせつていうのはないです。あまりにも、不似合いなんですよね。鳳凰つていうのは女王ですからね、そういう意味では、龍と鳳凰の組み合わせ、下に龍がいて、上に鳳凰が飛んでるつていう意匠のものが合う。という事ですね。この墨は、現代お土産墨でも見られるものですが、鳳凰の図の入った墨です。「龍鳳呈祥」つまり、龍と鳳凰とが瑞祥を提供する、縁起のいい図柄です。そういう意味で、墨の一つのタイプなんです。ずいぶん古くからあります。明の頃から少なくともある。

この墨は、二羽の鳳凰が向き合っています。中国の墨を磨いたら皆さんの上等な硯が傷だらけになります。現代の中国

の墨を磨る時には、それ専用の硯を私は使っています。駝基鳥硯というのがあつてね。これはもう、ざらざらの、こういう墨でも磨れます。歙州硯も使えますけどね、傷がつかます。じゃりじゃり音がします。明の頃は、品格があります。字がもつと良いです。

鳳凰を自分の町のシンボルにしてる所つて、今少ないんですよ。龍が多いです。皆さんの中で、中国の三峡下りやつたことがある方がいらつしゃると思いますが、三峡を下つてきますと、武漢に着きます。武漢のシンボルは鳳凰なんです。とっても珍しい。勘違いかもしれませんが、私は、武漢で何度も鳳凰の作り物を見た記憶があります。

鳳凰という鳥がどんなものか、イメージを掴めたほうが、文学を読むのにいいんじゃないかと思うんですね。例えば、白鳥という鳥も、テレビによく映つてるけれど、側でよく見たことありますか。私が内閣文庫に本を見に行つてるとき、すごい音がしたんです。何かと思つたら、池から白鳥が飛び上がつて、道路にわーつと降りたんです。物凄い音です。それで車が全部とまって、動けなくなつた。白鳥つて、見たところは優雅でしょう。けれども、側で見るとごつつくて怖いんですよ。

十四、鳳鳥（極樂鳥）・セイラン（青鸞）

孔雀の鳴き声（巻末資料⑦参照）

『本草綱目』には、桐の木の桐（白桐）と梧桐を描いているんですよ。白い桐も梧桐も、山東省辺りにたくさん生えているんですけど、これで楽器を作るわけです。雅楽、つまり中国の音楽の音階のもとなったのが、孔雀の鳴き声とか、セイラン、鳳凰など、色んな鳥の鳴き声だったようです。とても良い声、とは思わないんだけど、皆さんは孔雀の声を聞いた事がありますか。私はいつも録音しようと思うんだけど、しようと思う時に鳴いてくれないんです。とんでもない時にわーっと鳴くわけです。その孔雀の声は、破裂音です。ちょうど雅楽の、ぐわーんっていう物凄い音と同じです。この孔雀の鳴き声が笙とか、そういう楽器の音の元になっています。今度、機会があったら雅楽を聴いてみて下さい。宮内庁でもやっている。鳳凰や孔雀の鳴き声を、手本にして作っています。この演奏をやると、孔雀やら鳳凰が寄ってくると、そういうふうにかかれてますね。

資料（巻末資料⑦）の『本草綱目』の記述を見ますと、

「釈名」に「赤多きものが鳳であって、青多きものは鸞、黄多きものは鶇、紫多きものは鸞鷲、白多きものは鶇鷄」とあります。この『国訳本草綱目』という本は戦前に出て、戦後も出たんですけどね、戦後版は新しい学者が加わって、少し注釈が増えましたね。そこに和名として「ほうわうじやく」と書いてあります。つまり、鳳凰のモデルだから、「ほうわうじやく」なんですよ。でも、私は動物学的にちょっと疑問に思う事があります。

資料（巻末資料①・⑥・⑧―⑫）に孔雀がありますね。この絵を見ると、羽に目があるのとないのとで、孔雀と鳳凰をはっきり区別していることが分かります。

（注）鳥の鳴き声が聞ける資料として、以下のものを参照。

レス・レバッキエ文『世界の野鳥』コーネル大学鳥類学研究所。日本版二〇〇八。講談社。アカカザリフウチヨウ（1997）。カッシュヨクコクジャク（1228）。セイラン（129）の鳴声収録。

十五、「花鳥画」について

考古学的なものをお見せしたいと思って、中国のこの「花鳥画」を持ってきました。実は、考古学上の金石のものを集

めた本つていうのが出てるんですよ。

東帯につける帯の飾りにも、鳳凰があります。こういうのが、古い時代、殷とか、そういう時代に、すでにもうある。

という事は、鳳凰の認識っていうのはこういうものだった、ということがいえます。鳳凰の図像は、金石文の中にはたくさんあるんです。ですから、鳳凰っていうものは、古代の絵画にはあまり描かれなかったけれども、金石などに彫られたもの、殷の、そういうものにはたくさんあるんですよ。

(注)「花鳥画」については(巻末資料⑧-4)参照。その他参考文献に以下のものがある。

- 1、余城『中國的花鳥畫』中華民國一九八七・四 行政院文化建設委員會
- 2、濮安國『中國鳳紋圖集』一九八七・十二 香港萬里書店
- 3、張道一『中國圖案大系一』六一九九三・七 山東美術出版社
- 4、『原色日本の意匠』13『吉祥』昭和六十一年(一九八六)六・十六 京都書院

十六、異鳥図(巻末資料⑩参照)

資料(巻末資料⑩-1)はすべて、学問的根拠によって、色付けしたんですよ。

異鳥というのは、めずらしい鳥っていう事で、ヘンテコな鳥っていう意味じゃない。めずらしい鳥です。人の顔したのとかね。人の顔したのは、大体梟です。ミミヅク。人面鳥っていうものです。

資料(巻末資料⑩-2)に見えるのが明の頃の『山海経』の図録の挿絵に色を付けたものです。これが鳳凰です。槍を持つてるでしょう。こういう絵が『山海経』に出てくるわけです。けれども、さっき申し上げたように古い絵が無いんですよ。宋に遡ったような^註だから金石の中にあるもので、想像する事になるわけですね。

その次、これも鳳凰の一種。これが楽鳥、つまり極楽鳥でしようねきつと。それでこっちが、鸞鷲です。資料(巻末資料⑩-2)の下に見えるのが、鳥鼠同穴つまり、鳥と鼠、鼠はリスの一種ですけど、同じ巣穴で暮らしてるということですよ。本当にいるそうです。お互いに、自分の利益の為に一緒に住んでるんですよ。今も鳥鼠山という山があります。

資料(巻末資料⑩-2)の上に見えるのが、セイランです。セイランも孔雀と同じように羽を広げて、それで雌に呼びかけるんですけど、雌は知らん顔してますね。動物園なんかを見てね。側に来るんだけど、気に入らなければ、ふい

とすぐ行っちゃいますね。

人間もそうでしょね、男の人がいっぱい手を尽くしても、それを嫌だと思ふ女性はそっぽ向いてスーッとどっか行っちゃいます。

鳥によつては、雄に訓練までしますね。訓練ですよ。雄が訓練される。雌っていうのは強いんですねやっぱり。なぜ訓練するかというと、自分の子孫を守るためには、強くないと困る。そういう理由で、色々訓練するんですよ。こういう事もある程度知っておいたほうが、文学を理解するには良いだろうと思います。

資料（巻末資料③）ですが、下に鸚鵡がいますね。烏鳳は、実はオカメインコだと言われています。オカメインコって知ってますか。日本にずいぶん飼われていますよね。飼う鳥として。頭に冠がありますね、オカメインコは。鳳凰の仲間だから、冠が必要。セイランも、カムリセイランと普通のセイランがいます。

（注）資料②—1『爾雅音図』参照。鳳凰の表情は清代風であるが鳳凰と梧桐図の組み合わせとしては古い例である。

十七、現代の『山海経』本文

（巻末資料⑤—1参照）

『山海経』のうちで最初に出来た部分は、最初の五巻です。南山経、西山経、北山経、東山経、中山経、そういう五つの部分、五蔵山経ですね。今の『山海経』は十八巻ですから、十三巻は海経といって、おおよそ外国のものだと思います。まあ、国内のものもあつたと思いますけどね、つまり、領土がどんどん広がって、どこまで、いつのものはつきりしないものがあります。そうはいつても、五蔵山経と、それから、海経十三巻が加わる、っていうのが大体今の『山海経』っていうふうに考えられますね。

まだまだ、私の言いたい事はあるんですけども、そろそろ時間のようですね。要するに、文学というものは博物誌の宝庫なんです。ですから、色んな作品を読んだとき、ちょっと注意して、作品に出てくるものに目をつけるのが良いんじゃないか。そういうふうにあります。

最後に録音から起し成稿して下さった編集担当の廣川達也さんに感謝申し上げます。

(とちお・たけし 成城大学名誉教授)

*本講演は、平成二十八年十月二十二日(土)成城国文学会年度大会での特別講演を録音から起し成稿したものです。

バーバラ・テイラー、リチャード・オー著
 林澤亮三監修
 絵で見る世界鳥類地図 1994.7.20 同朋社出版

3



尾羽の中央には2枚の特別長い羽がある。

雄は目も眩むような歩り姿を扇形に広げて雌に求愛する。

セイラン

森林に生息するセイランは繁殖期になると雄はまず自分のまわりの地面から葉や枝、小石をきれいに掃除する。それから大きな声で雌を呼びながら屋を立てて歩き回る。雌が近づいてくると前に行ってきらきら光る目玉模様がたくさんついた長い翼を大きく広げて雌の気をひくのである。

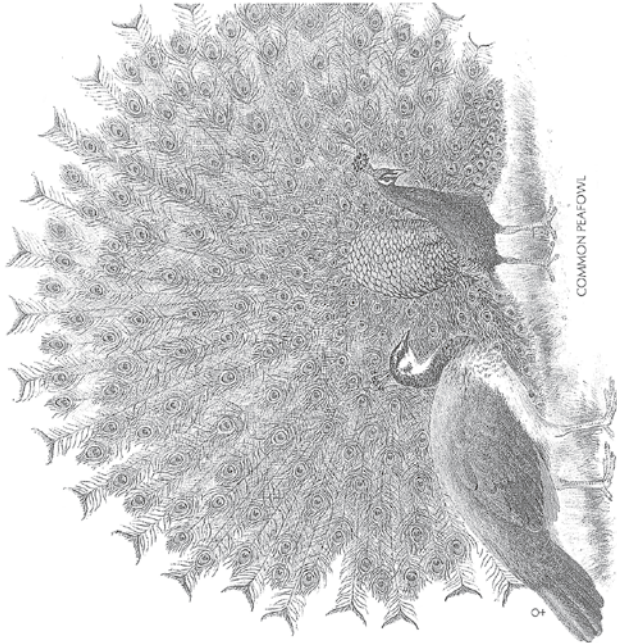
セイラン
 (*Argusianus argus*)
 全長1.5m(雄)、60cm(雌)。



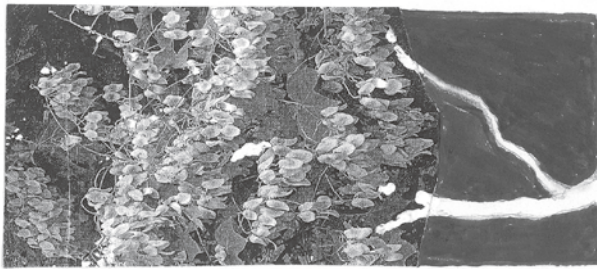
御即位10年記念特列展 皇室の名宝

7

アイズドクゾク



資料①

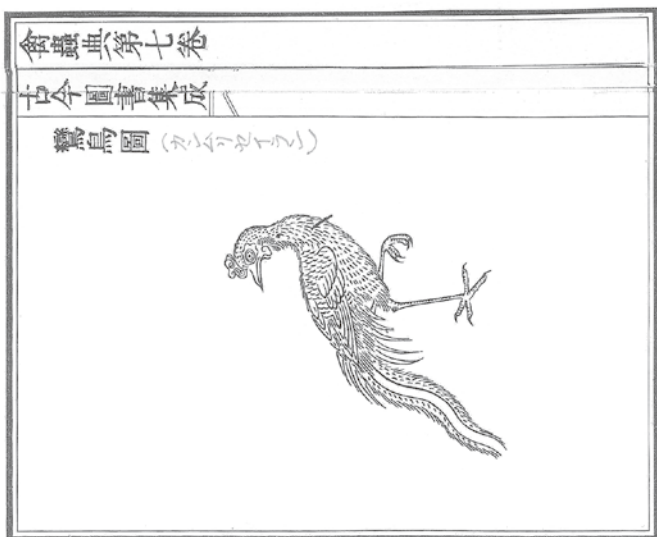
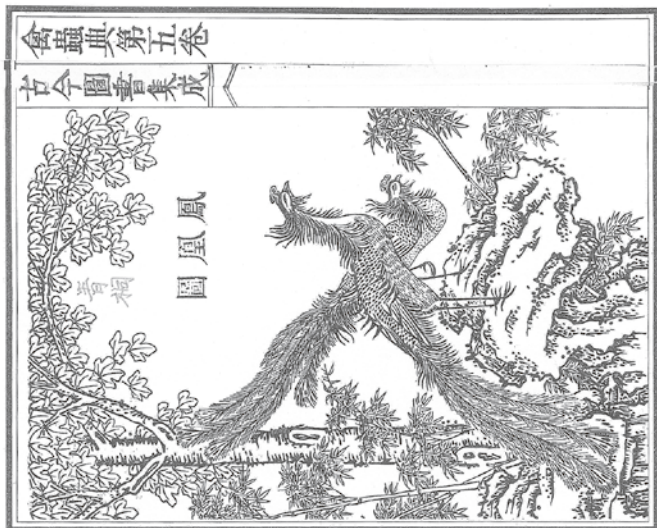


梧桐と爾雅同郭璞の見た山海經の鳳凰もこれに近いものと思える。野棠は漢代の図に讀とつたと思える。梧桐と鳳凰と組合わせた図としては最も古いもの流れてある。



爾雅音圖 釋鳥第十七 全6冊 私藏

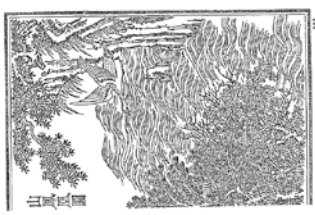
嘉慶六年影宋繪圖本重要刊 藝學軒藏版
(尾題) 秣陵陶士立臨字 普澄彭葛程刻



資料②-1

[□] 欽定古今圖書集成 鳥部 卷一百一十三(一六三) 初册
 勅撰の類書。影印縮小本も出版されている。中華書局本(歿前筆)。

上
下
だまき



上
下
はな



資料②-2

明・沈南蘋 芥川と梧桐 動植帖 昭和18.15 藏書院 1936

4



奇帯鳥



鸚鵡平ハツ



宮典籍展観大札會録 牙別六十一 東京石叟會主

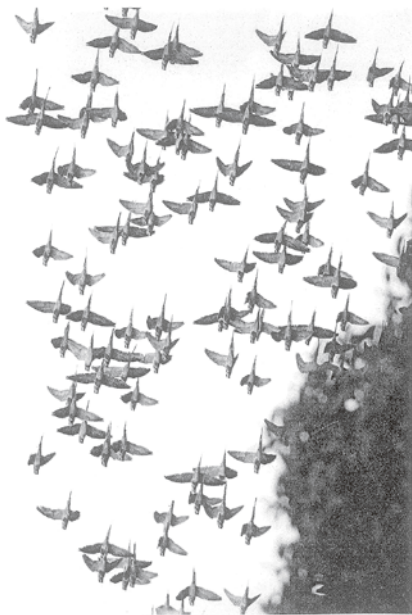
1151 沈南蘋画花鳥図

雍正乾隆年間

2 幅

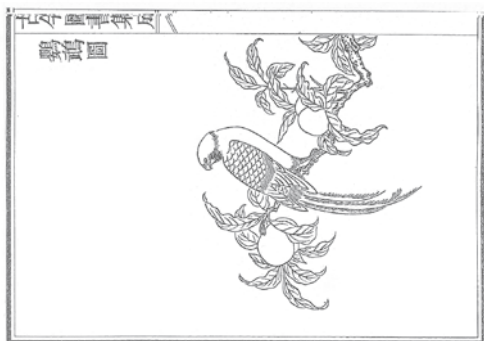
4 鸟类志万鸟图 中国鸟类图鉴 2013.1 海南出版社

鸚形目 > 鸚鵡科 | PSITTACIFORMES > Psittacidae > *Psittacula krameri*



如此巨大的群集通常出现在热带地区/云南/海南

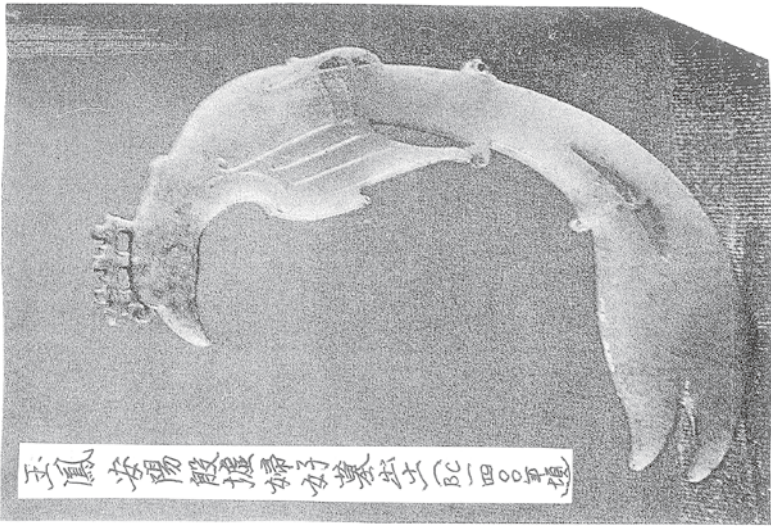
3



鸚鵡部彙考	
釋名	
鸚鵡	禮記
白鸚鵡	佳燕余志
乾草	本草綱目
腺陀	本草綱目
紅鸚鵡	本草綱目
五色鸚鵡	本草綱目
鸚鵡	山海經
鸚鵡	本草綱目
鸚客	本草綱目
綠鸚鵡	本草綱目
白鸚鵡	本草綱目
黃鸚鵡	江寧府志

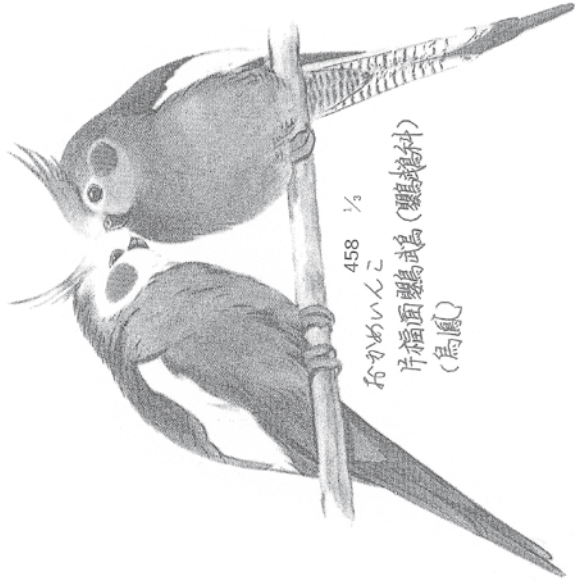
資料③

2



黒田長禮 鳥類大図説

PLATE 57



458 1/3

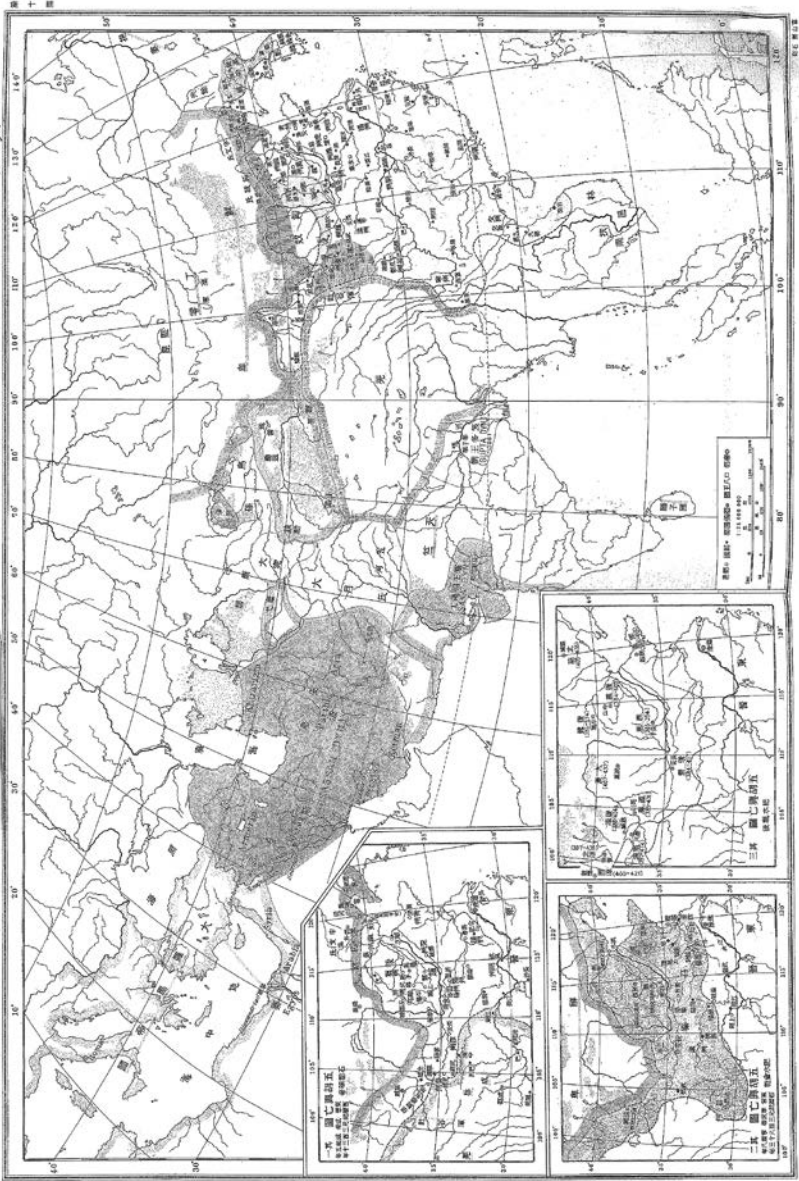
おかめいんこ

片福面鵪鶉成鳥(鵪鶉科)

(鳥鳳)

2. 成以晉鄭漢AD276~

西元300年以前之東洋讀史地圖 1925 大正14.2.25 富山房



<small>雅</small> 雅	<small>云</small> 云	<small>鳳</small> 鳳	<small>雞</small> 雞	<small>頭</small> 頭	<small>燕</small> 燕	<small>頰</small> 頰	<small>蛇</small> 蛇	<small>頰</small> 頰	<small>龜</small> 龜	<small>背</small> 背
雅	云	鳳	雞	頭	燕	頰	蛇	頰	龜	背

<small>魚</small> 魚	<small>尾</small> 尾	<small>雌</small> 雌	<small>日</small> 日	<small>皇</small> 皇	<small>雄</small> 雄	<small>日</small> 日	<small>鳳</small> 鳳			
魚	尾	雌	日	皇	雄	日	鳳			

<small>山</small> 山	<small>山</small> 山	<small>山</small> 山	<small>山</small> 山	<small>山</small> 山	<small>山</small> 山	<small>山</small> 山	<small>山</small> 山	<small>山</small> 山	<small>山</small> 山	<small>山</small> 山
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山

<small>有</small> 有	<small>有</small> 有	<small>有</small> 有	<small>有</small> 有	<small>有</small> 有	<small>有</small> 有	<small>有</small> 有	<small>有</small> 有	<small>有</small> 有	<small>有</small> 有	<small>有</small> 有
有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有

<small>翟</small> 翟	<small>似</small> 似	<small>雉</small> 雉	<small>而</small> 而	<small>大</small> 大	<small>長</small> 長	<small>尾</small> 尾	<small>或</small> 或	<small>住</small> 住	<small>樂</small> 樂	<small>樂</small> 樂
翟	似	雉	而	大	長	尾	或	住	樂	樂

<small>隹</small> 隹	<small>屬</small> 屬	<small>也</small> 也	<small>名</small> 名	<small>曰</small> 曰	<small>鳥</small> 鳥	<small>鳥</small> 鳥	<small>見</small> 見	<small>則</small> 則	<small>天</small> 天	<small>下</small> 下
隹	屬	也	名	曰	鳥	鳥	見	則	天	下

<small>會</small> 會	<small>會</small> 會	<small>舊</small> 舊	<small>說</small> 說	<small>鸞</small> 鸞	<small>似</small> 似	<small>雞</small> 雞	<small>瑞</small> 瑞	<small>鳥</small> 鳥	<small>也</small> 也	<small>周</small> 周
會	會	舊	說	鸞	似	雞	瑞	鳥	也	周

<small>成</small> 成	<small>王</small> 王	<small>時</small> 時	<small>西</small> 西	<small>戎</small> 戎	<small>款</small> 款	<small>之</small> 之				
成	王	時	西	戎	款	之				

風 甲骨文

彖

引	又	東	五	百	里	日	丹	内	之	之	山
南山	東	東	五	百	里	日	丹	内	之	之	山
其	上	多	金	玉	丹	水	出	焉	而	而	南
其	上	多	金	玉	丹	水	出	焉	而	而	南
流	注	于	渤	海	渤	海	海	岸	曲	崎	
流	注	于	渤	海	渤	海	海	岸	曲	崎	
頭	也	有	鳥	為	其	狀	如	雞	五	采	
頭	也	有	鳥	為	其	狀	如	雞	五	采	
而	文	名	曰	鳳	皇	首	文	曰	德	翼	
而	文	名	曰	鳳	皇	首	文	曰	德	翼	
文	曰	義	背	文	曰	禮	脣	文	曰	仁	
文	曰	義	背	文	曰	禮	脣	文	曰	仁	
腹	文	曰	信	是	鳥	也	飲	食	自	然	
腹	文	曰	信	是	鳥	也	飲	食	自	然	
自	歌	自	舞	見	則	天	下	安	寧	漢	
自	歌	自	舞	見	則	天	下	安	寧	漢	
時	鳳	鳥	數	出	高	五	六	尺	五	采	
時	鳳	鳥	數	出	高	五	六	尺	五	采	
莊	周	說	鳳	文	字	與	此	有	異	廣	
莊	周	說	鳳	文	字	與	此	有	異	廣	

資料⑥

黒田長禮 鳥類彩色大圖説 1

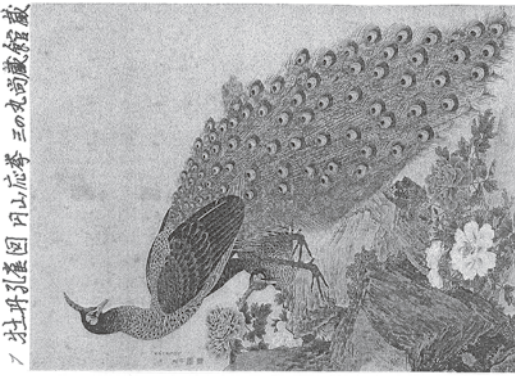
PLATE 4



24 1/2 鳳凰
ふうてう
鳳(鳥)おほふてう(鳳凰)
(鳳鳥科)



25 1/2 比翼鳥
ひやくと
王叔夜鳥、帝玉、聖鳥
(鳳鳥科)



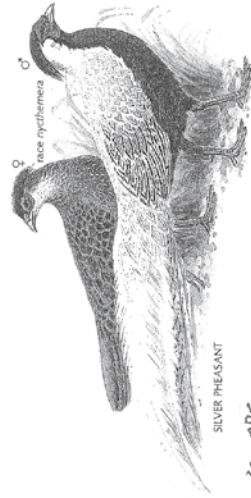
ノ 社井孔雀図 円山応挙 三の丸蔵館蔵

鳳鳥(聖鳥)おらん
むたいちゅう

異鳥部 55



無對鳥圖



白閑鳥 ハツカン

♀
♂
rice pylemeera

SILVER PHEASANT



日光東照宮裏社持殿 枇杷板 批杷板 取田泉・河野元昭解説『日光東照宮の装飾文様人物・動物・絵画』1994.4.25
 角川学芸出版社



5 京都宇治平等院銅製鳳凰 銅史文圖鑑上 古倉喜重著時代

一五三三
昭和八・四子文書刊行會



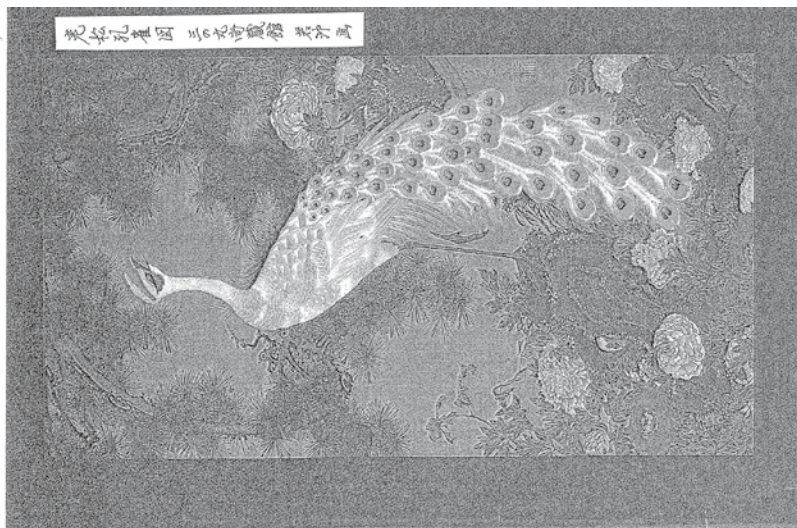
6 旭日鳳凰図 一幅 彦之上美術館蔵 若冲画



3



4



鳳同左



新異 卷之四十五 鳳同左 宋 趙孟頫 畫 宋 趙孟頫 畫

明 仇英 馬吹簫引鳳 1433~1580

10

會真圖第四十一卷	
孔雀部彙考	
釋名	
孔雀 春秋元命苞	都護 莽字客話
越鳥 本草綱目	南客 本草綱目
摩由迦 本草綱目	
古今圖書集成	
孔雀圖	

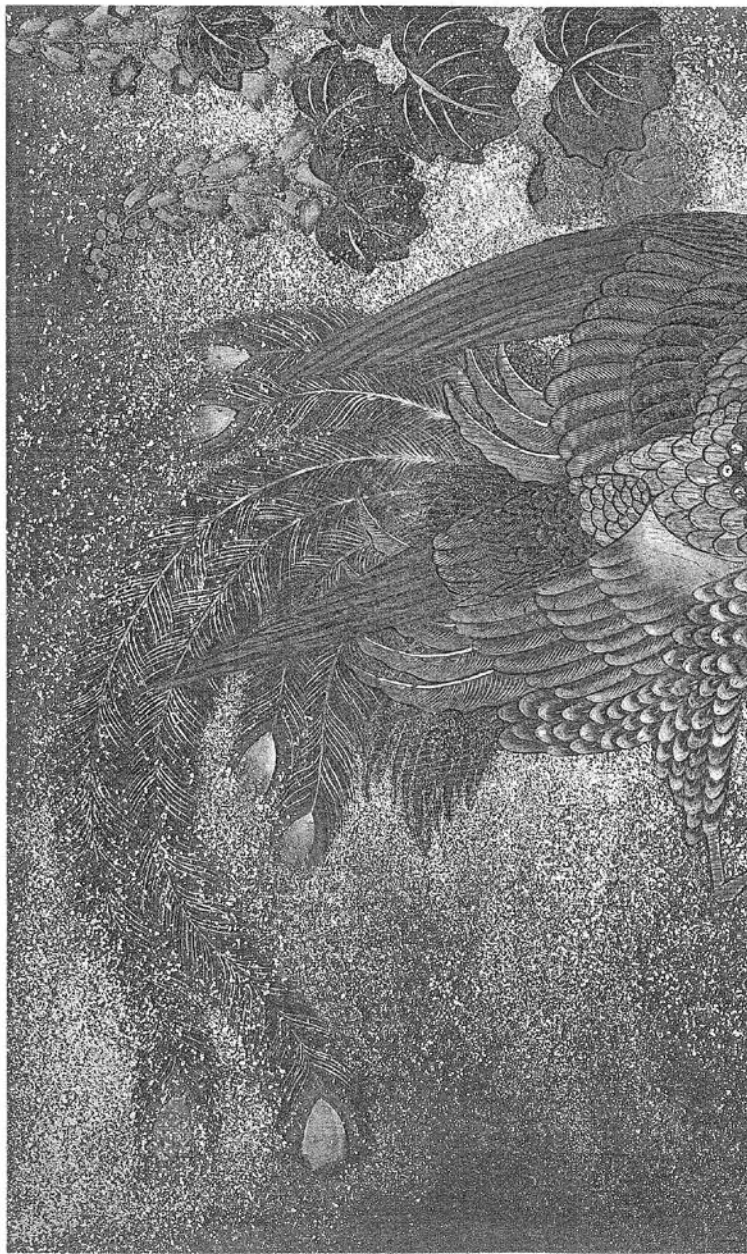
新異 卷之四十五 鳳同左

7 鳳凰引圖 清任 墨画 年代未詳 東京工芸美術学院蔵





津端道孝画 桐鳳凰図 日本花鳥画② 昭和55.11.20 京都書院 (桐は白桐)



5 100 鳳 壘

総高 壘蓋
壘×壘蓋 8.3cm×4.2cm
壘・壘蓋 1.3cm・60g

この壘は素題がなく鳳壘は仮題である。土留壘蓋に御感の文字がある。この壘は六角二筋とキョウトになっているものをかなで考題したが、この壘は書かけなくなつた。手桶なので磨消されたのだろう。真の銘は壘蓋と思われ、これは僅く少なく、後世のものかとである。「和石室壘蓋」に収める。



双 鳳

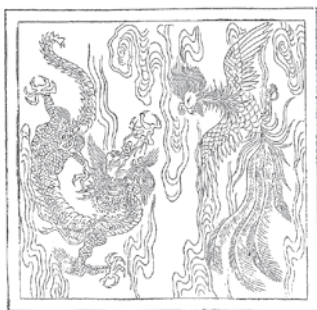


6 仿唐式和墨冊命

双 龍



『方氏墨譜』私藏



7 龍鳳呈祥

鳳有翼龍有鱗
君不獨興必有
良臣
古樂府歌
方于魯製

方氏墨譜國華 卷二

一 義藏

1
 日本初期の作意は、鳳凰の配を、
 なる。経の「鳳凰」(四之三)の「鳳凰」は、
 聖文の「将まつて、我國製作の瑞鳥なる



藤寺王輪廊木師 鏡鏡八鳳凰雲飛

宇野晴村古書知識鑑賞一九九六三社



和曇「龍鳳皇祥」

中10.7×厚1.8cm
 和曇に「龍鳳大宇業正商標」と有
 天保元年(1850年)
 紙箱入

2
 國文大圖鑑工上古倉長早安時代一九三
 吉川弘文館

3
 和曇「龍鳳皇祥」



3

金銀花鳥骨八
 鏡

和曇「龍鳳皇祥」は、
 和曇に「龍鳳大宇業正商標」
 天保元年(1850年)
 紙箱入

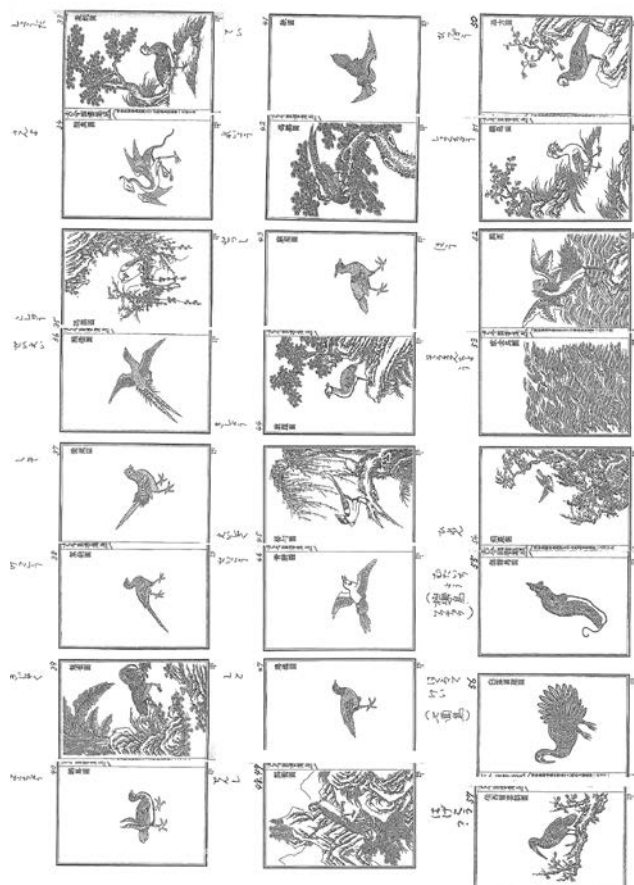
4
 和曇「龍鳳皇祥」は、
 和曇に「龍鳳大宇業正商標」
 天保元年(1850年)
 紙箱入

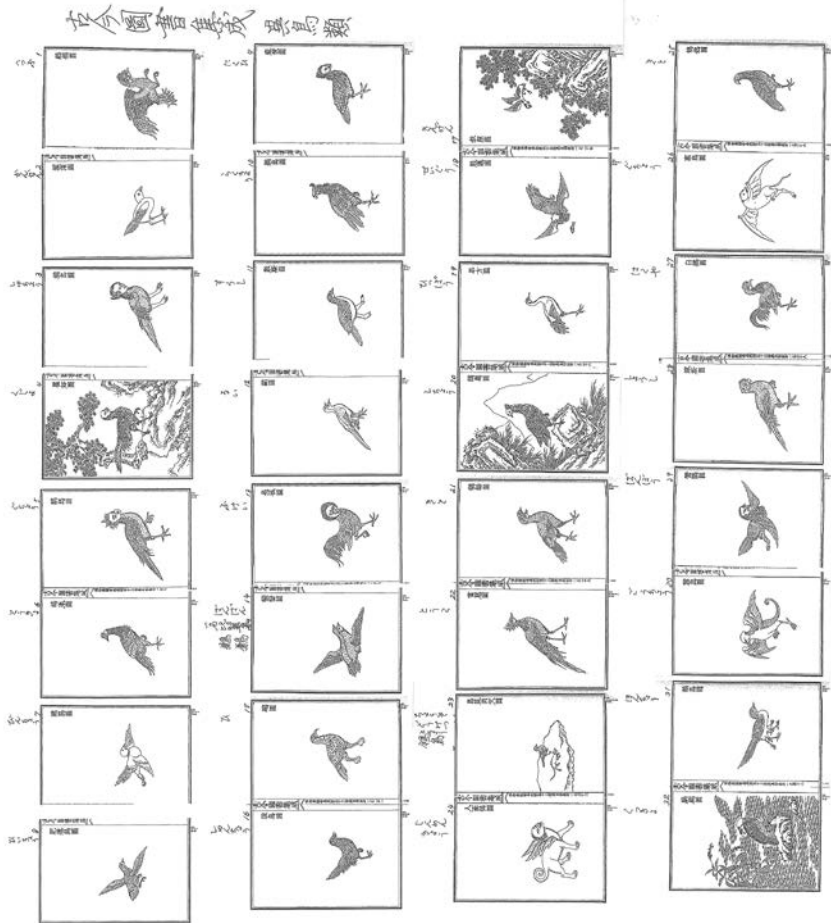
和曇「龍鳳皇祥」は、
 和曇に「龍鳳大宇業正商標」
 天保元年(1850年)
 紙箱入



和曇「龍鳳皇祥」

資料⑨





(鳥風同穴)

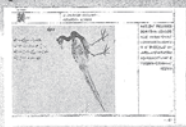
今非之龍有陶於一
 賜子之純主於一
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之



繁之

山海要物

今非之龍有陶於一
 賜子之純主於一
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之



華鳥

山海異物

今非之龍有陶於一
 賜子之純主於一
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之
 一之之之之之之之

